



特選
2021
日本PTA全国
協議会会長賞

第54回「おかねの作文」コンクール

コロナ時代に「おかね」について考えた事

東京都・筑波大学附属中学校 1年 京田 悠雅

最近「おかね」について考えることがあった。そのきっかけは、新型コロナウイルスの感染対策で家族では、一切、硬貨や紙幣の利用をしなくなったことだ。

僕はもともと、古い紙幣を集めたり、紙幣に出ている人を調べたり、インターネットに出ている「紙幣を折ったら面白いデザインが見える」などに興味があった。

しかし、最近では一切、硬貨や紙幣に触れることがない。これはコロナ感染のリスクを抑えるためだ。お小遣いは電子マネーでもらう。買い物も電子マネーでするし、電車やバスは交通系ICカードにチャージをしてもらう。自動販売機も交通系ICカードで利用している。外出する時も、携帯電話と交通系ICカードがあれば、財布は不要だと考えるようになった。硬貨や紙幣を使わなくなると、だんだんと硬貨や紙幣が「汚いものである」とすら感じてしまうようになった。

また、今まで僕はお小遣い帳をつけたことはなかったが、電子マネーを利用することによって、自動的に利用明細が見られて「とても便利だな」と考えるようになった。親に話を聞くと、電子マネーを使うと、1%から1.5%ぐらいのボーナスもついて得だという。

硬貨や紙幣からクレジットカードや電子マネーを利用した取引への移行は、今後ますます加速していくと考えた。しかし、便利な一方でいくつかの不安を同時に感じている。

一つ目は、「おかね」のありがたみを感じるようになったことだ。お小遣いを紙幣で親からもらった時は、「やったー」と非常にうれしかった覚えがある。電子マネーで事務的にもらうと、その喜びが半減してしまうのだ。

二つ目は、セキュリティについてである。財布を落としても、中に入っている硬貨や紙幣の被害しかないが、携帯電話や交通系ICカードを落とすと、それ以上の被害が出そうで怖いし、また、インターネットなどで、知らないうちに使われていないかなど心配である。

三つ目は、電子マネーに慣れてしまうことで、将来お金に関してだらしがなくなるといふ不安である。「おかね」がある時に物を買う、物が欲しいから「おかね」を貯めるといふ、あるべき姿に対し、電子マネーやクレジットカードは、「おかね」が今無くても物が買えてしまう。今から電子マネーに慣れてしまうことで、将来、自分でクレジットカードを持てるようになった時に、きちんと管理できるか不安になった。

「おかね」について、親と話をした。そしてアドバイスをもらった。「おかね」は、形は硬貨や紙幣、電子マネーであれ、その価値は変わらない。とても大切なもので、それは自分で働いて得られた報酬だからと教えてくれた。

セキュリティについては非常に気を使い、毎日きちんとチェックしているそうだ。携帯電話や交通系ICカードの紛失時に自分でやることも教えてくれた。

「おかね」を使う用途としては、将来「おかね」を生み出すものに「おかね」を使うことをアドバイスされた。僕の場合には、好きな仕事が将来できるようになるための勉強に「おかね」を使うことがベストなんだろうと考えた。これを一般的には「自分への投資」ということも学んだ。

親も学生の頃は、「おかね」のこと、「おかね」を増やすということ、税金のことなどはあまり知らなかったという。日本ではあまり学校で、それらのことを教えてくれないらしい。親はいくつかの学ぶための書籍を紹介してくれた。

親のすすめてくれた本の中から「金持ち父さん貧乏父さん」という本^注を読んだ。僕はお金持ちになるために生きているのではないので、内容は難しかったが、子供のうちから「おかね」、投資、保険、税金のことをしっかり勉強して選択肢を持つというのは大事であるという部分に共感した。

時代によって、電子マネー、クレジットカード、仮想通貨などと「おかね」は形を変えて世の中に流通する。一番自分に合った形で「おかね」を利用していきたいと考えた。その上で、もっと「おかね」について自分自身も勉強しないといけないと考えた。

(注) ロバート・キヨサキ著、白根美保子訳『改訂版 金持ち父さん貧乏父さんーアメリカの金持ちが教えてくれるお金の哲学』 筑摩書房 2013年11月